スーパーロボット大戦W ～ザクさんと一緒～

大陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーパーロボット大戦Ｗ　～ザクさんと一緒～

【Ｎコード】
Ｎ２２０７Ｍ

【作者名】
大陸

【あらすじ】
気がついたら…。何処だここ？
（あ！やっと起きてくれましたね！）
一人と一機が大暴れ！（しないかも）
勘違いが呼ぶ勘違い！（そこまでじゃないかも）
最強で何が悪い！ばったばったの快進撃！（快進しないかもしれない）
スパロボＷの世界に迷い込んだのは、ザクさんとオリ主！！

プロローグ（前書き）

　お初にお目にかかります。

大陸と申します。

この作品は、「スーパーロボット大戦W」の二次創作作品になります。

内容につきまして、「オリ主」「最強要素」「勘違い系」が含まれます。

これらを許容できない方は、お手数ですがお戻りくださいませ。

また、作中において原作と異なる展開、及びキャラ間の関係性が崩れる可能性を多分に含みます。

ご注意下さい。

それでは、宜しくお願い致します。

以下、本文について。

＝＝

スパロボWをやったことがある人は飛ばし推奨ですわ。

読まなくても平気だったりしますので、やったことない人も飛ばしても可ですわ。

プロローグ

～連合宇宙暦の成り立ちから一世紀の変換～

旧世紀末期の地球。

かねてからの天然資源の枯渇と環境悪化、人口増加は限界を迎え、世界の経済と秩序は崩壊しようとしていた。
日に日に激化する各地の紛争は地球圏全体を包み、ついに第三次世界大戦が勃発した。

人類は自らの起こした戦争に恐怖し、全ての国家・民族を一つに統合する事で戦いを収めようとした。
その結果、全人類を政治・経済・軍事的に統一した「世界連合国家」が誕生し、
最後まで反対していた月面自治都市の鎮圧、
いわゆる「月面戦役」の終結をもって「連合宇宙暦」が始まったのである。

世界連合国家は新たなる生活の場である宇宙を開発することで戦禍の傷を癒そうとした。
世界大戦の成果として得られた物理・エネルギー分野の飛躍的な発展は、
この人類の一大プロジェクトにおける原動力となった。

スペースコロニーの建設、月の再開発、火星の開発、外宇宙の探索…。

宇宙空間は新たなフロンティアであり、希望の大海であった。

驚くべき短期間の間に幾つもの惑星都市やスペースコロニーが建設された。
人類がその勢力を火星の公転軌道にまで広げた連合宇宙暦初頭は、宇宙の蜜月時代であったと言えよう。

だが、この蜜月の時代も時と共に色あせていった。

人類全体を巻き込んだ開発の熱が冷めていく中、一部の人間の独裁により世界連合国家はその志を失っていった。
特に隷属を強いられたコロニー群からの反発はすさまじく、世界連合国家を事実上支配した「ＯＺ」と、
それに反対する者との戦いは、ついには地球圏全体を巻き込む事となった。

「革命戦争」と呼ばれたこの戦いは、世界連合国家元首トレーズ・クシュリナーダの戦死により終結を迎えた。
そして、彼の隠された意志もより、世界は国家・民族それぞれを尊重する新たな共和制に生まれ変わった。
旧世紀同様に各国家に主権が置かれ、その意思統一機関として「新・国際連合」が誕生した。

時に連合宇宙暦９８年のことであった。

しかし、この頃から地球と人類は、宇宙の脅威に立て続けにさらされる事になる。

連合宇宙暦９７年の白鳥座方面調査プロジェクト「シグナライト計画」の失敗と、
正体不明の巨大人工物「Ｅｌ－０１」の落下から始まり、
革命戦争終結後、人類は外宇宙からと思われる謎の敵の侵略を受け

る。

後に「ラダム」と呼ばれる事になるその生命体に、完成間近であった軌道リング「オービタルリング」を占拠され、人類は地球と宇宙の往来に大きな制限を受ける事となった。

更に木星方面から侵攻してきた異文明、通称「木星トカゲ」により、火星の大地に建造された都市は壊滅し、人類は火星圏からも全面撤退する事となった。

また同時に、地上では発達したテクノロジーがもたらした新たな脅威、ロボットによるテロ活動が多発していた。

新・国際連合の下で新たな時代を歩み始めた人類であったが、これらの脅威は人々の恐怖と不安を駆り立て、平穏はいまだ遠くにあった。

その結果、解決されるはずだった問題は手付かずのまま残り、それは世界の奥底に消せないしこりとなって堆積しつつあった。

経済力をバックにした一部の人間の専横、遺伝子調整を受けた人類「コーディネーター」と「ナチュラル」の確執など…。

それらが火種となり、いつまた人類同士の戦いが起きてもおかしくはなかった。

連合宇宙暦９９年。

明日をも知れない世界は今、

新たな戦いを迎えようとしていた。

～宇宙開発公団資料室編

「宇宙開発白書」第一章冒頭より抜粋

プロローグ（後書き）

長々とご苦労様ですw

良く分からなかったら諦めて続きへドゾー。

もしくはもう一度読む勇気ある方はバックして下さいませせ。

第一話　宇宙の海に帆をあげろ（前書き）

本編の開始です。
基本的にオリ主視点の時は情景描写が少なくなります。
ご了承下さい。

第一話　宇宙の海に帆をあげろ

第一話
宇宙の海に帆をあげろ

＝＝？？？＝＝＝

暗い。

ごつり、と肘が硬いものに当たる。
『痛っ！』

ここは？
『あ、起きました？』

一人（？）、呟き重いまぶたを開く。
『おーい。聞こえてますかー？』

一体、ここは何処だ？
『…厨二病。（ボソッ）』

「んだとコラー！？」
ってあれ？俺は一体誰に話しかけてんだ？
人がせっかく格好良く登場シーンを盛り上げているというに。何処のどいつだ、全く。

『あ、おーい。こっちですよ、こっち。』
声？どこから？てか、ここは何処だ、マジで。

暗くて何も見えん。なんか椅子っぽいのに座っているのは分かるんだが…。
座り心地悪いなぁ。

『あ、内部電源入れますね。』
おぉ。モーター音が聞こえてくる。
…この微振動ってなんか興奮しない？…しませんか、すみません。

「おっ、パネルが光った。」
すげー。座ってる周りってパネルだらけジャン。
アブね、変なとこ触らんでよかった。
いろんな計器？ッぽいのがあるけど、よくわからんなぁ。
あ、けど日本語で書いてある。よかたよかた。

っておい。
なんだこれ？

「おーい、声さんよ。何で俺機械、ってか椅子に繋がれてんの？」
なんか、首に違和感があると思ったら変な管が首から出てるし。
なんぞこれ。
マト〇ックス？救世主とか言っちゃうの？俺。
…抜いたら死ぬのかしら？

『あ、抜いても平気デスヨ。』
平気なんかい！？
ってか何で心の声を読む！？そして今更だが、誰だお前！！？

『あ、申し送れました。隊長のザクです。』
…は？

『ですから、隊長のザクです。
正式名称ＭＳ－０６Ｓ　ザクＩＩと申します。どうぞ宜しく。』
はぁ、ご丁寧にどうも。
じゃなくて、何でザク！？あのザク！？どのザク！？（知るか）

「ちょっと待て。ザクさんとやら。」

『ハイハイ。』
ハイは一回でよろしい。じゃなくて。

「まぁ、あんたがザクなのは百歩譲っていいとして、なぜ俺がここに？んでもってここは何処？」
俺の記憶が確かならば、普通に就寝したと思ったのだが。
あれか、夢かこれ？
わーい、憧れのＭＳのパイロットだー。ってなると思うかバカヤロー。

『なるほど、ソレがノリツッコミですね。』
違わい。

『話がそれましたね。先ず、あなたについてですが、こちらはさっぱり分かりません。
私自身、なぜこんなところにいるのかも理解できませんし、あなたが私の中にいる理由も同じくです。
二つ目に、現在地についてですが、こちらは分かります。
ココは、太陽系内宇宙の地球圏宇宙ですね。座標は太陽軸でＸ１３２２８５、Ｙ００１２５３、Ｚ５０５６５３宙域です。』

さっぱりわからん。

『まぁ、地球からちょっと火星よりの所と言って問題ないでしょう。』
なるほど。
…宇宙？
『はい。あ、メインモニター起こしますね。』
おー。
暗い。
「何も見えんぞ。」
真っ暗やん、星は？お星様は何処？
『あ、すいません。こっちにはあまり高い等級の星がありませんでしたね。…よっと。』
おお。なんか微妙に揺れを感じる。
『どうですか？』
おおおおおお！あれは！？
「火星！？」
見たこと無いから良く分からんが、赤い星が見える！遠いがな！
『そうです。あれが火星です。ちなみに、先程の視線の先に地球があります。
ただ、距離が遠すぎて見えなかったんですけど。』
なるほど。
けど、なんかあれだなぁ。宇宙ってもっとキラキラしてんのかと思ったけどそうでもないんだな。

見た目真っ暗だし。さすがに火星とかの大きな星は見えるけど、それ以外は。。

『まぁ、近くに恒星が無いですしね。あなたが言う、キラキラというのであれば、宇宙空間で星は瞬きません。
　地上では、大気のフィルターを通して、光が瞬いているように見えますが、宇宙では大気が無いので。』
へー。
あれ？

でもさ、あそこキラキラしてね？

『？何処です？』
いや、あそこ。
ほら、また光った。

『確かに。ちょっと望遠にしてみますか。』
んー。なんだろあれ？人？宇宙に？
まっさかー。

『あれは、モビルスーツ！？』
何！？ってことはあそこに行けば人がいるのか？
行かねば！早く行かねば！！

『様子がおかしい、戦闘中？』
え。

『間違いありません。戦艦１と機影が８。状況は分かりませんが恐らく戦闘中です。』
まじでー。

どないしよ。

『どうします？無人機の可能性もありますが。』

まぁ、そうだけどさー。

「戦艦があるから、少なくともそっちは有人だと思うけど。」

いくらなんでも無人の戦艦は無いだろＪＫ。

だったら行って見よう。最悪、遠くの方から見てればいいんだし。

戦闘が終わったらこっそり出て行こう。そうしよう、うん。

『そうですね。とりあえずは行ってみましょう。』

よし行けー。

…と、結構衝撃がくるな。

おー、早い早い。段々見えてきたな、うん。

俺にも分かるよ、あれ確かに戦っちゃってますね。

『そろそろ索敵範囲に引っかかるかもしれませんね。この辺りでいいでしょう。』

お、そう？

あ、小さい星の影に隠れるんですね、分かります。

さてと、あっちはどうなってるかなー？

ん？

あの機体はもしや…。

『見覚えが？』

あ　れ　は

「死神ｋｔｋｒ！」

デスサイズさんじゃないっすか！

あれ？お隣はサンドロック！？てことはデュオとカトルが乗ってるのか！？
ここってガンダムW？あれ？ザクいたっけ？

『…お知り合いですか？』
いやいや。こっちが一方的に知ってるだけ。…にしても、作品はともかくここはガンダムの世界（？）でいいのかしら？
ふむ、時空トラブルってヤツですな。

『トラベルです。』
そうとも言う。
だけどおかしいなぁ。一緒に戦ってるっぽい機体、ガンダムシリーズにあんなのいたかなぁ？
なんか戦艦とデザインが似てるけど、こっちも見たこと無いし。
アフターストーリーの新造艦かしら？

『なんだか良く分かりませんけど、冷静ですね。私は機械ですからあれですけど。』
まぁ、極度の楽観主義者と、自他共に認める存在ですから。ぼかぁ。

『…まぁ、あなたがいいならそれでいいですけど。』
なら良し。
しかしあれだね。すごいね、モビルスーツ同士の戦闘って。
動きが人並みはずれてるよ。（人じゃないけど）
ってあれ？なんか光が迫ってきてない？ちょま、おい。

ドガァァァァン！！！（※宇宙空間では音は響きません。作中の演出です）

「うどわぁぁぁぁぁぁ！！？」（何か、電波的なものが聞こえた気

がするが気にしない！）
どうした！何があった軍曹！？

『軍曹ではありません。隊長のザクです。
流れ弾が、隠れていた星に当たったようですね。損傷はありません、ですが…。』
ですが、なんやねん。
何その沈黙。嫌な予感がびんびんしちゃうんデスけど。

『発見されました。』
デスよねー。（現実逃避）
で、どうすんの？やれるの？逃げるの？

『…やりましょう。逃げて、再度有人機と遭遇できるとも限りません。
いきます。』
頑張れ！ザクさん！！応援してるよ！！

『了解！！』
来てますよー！やったって下さい！てか勝てるのか？ザクさん。
…何ですかそのバカでっかいヒートホーク！？ザクさんよりでかくね！？
てか敵さん速いよ！やばいっすよ！撃たれますよ！

『えい。』
ザックリ。

あ。斬れた。
ソレはもうぱっくりと。

『またつまらぬ物を斬ってしまった。』
いや、何で知ってんのさ。

『大丈夫です。ちゃんとコックピット部分は避けて切断しましたし、恐らく。』
恐らくかよ！？

『しかたないでしょう。情報にない機体なんですから。』
まぁ、そうだけどさ。
あ、大丈夫そうだね。なんか丸っこいカプセルで逃げてった。
は！ザクさんに勝とうなんざ百年早いわ！！出直してこいや！来なくていいけどね！

『あちらも終わったようです。』
おー、最後の一機が捕まってる。

《こ、降参だ！投降する！い、生命だけは助けてくれ！》
おりょ？通信？なんで？

『全チャンネルで開いた通信ですね。範囲内の全ての機体に通信がいきます。』
へー。

《……》
ってあの変なデザインの機体、銃を！？
ザクさん！

『了解。』
よし！接近して、つかんだ！
アブねー。ザクさんナイス！

《お兄ちゃん！》
ん？変なデザインの機体から通信？
お兄ちゃんなんてそんな…、もっと呼びたまえ。
『へ、変態だー。』（棒読み）
…常々疑問だったのだが、何処からそのネタを仕入れてくるんだい？ザクさん。

《大丈夫だ。いくらムカついたからってここで撃っちまったら海賊と変わらねえからな…》
あ、そちらの機体は二人乗りでしたか。兄妹で乗ってるのね。

《それに、コイツに止められちまったしな。》
はい、私めが。

《…誰だ。てめぇ。》
なんか敵意むき出しですな。まぁしょうがないか。
ご挨拶は私めが？ザクさんやる？

『いや、頼みますよ。』
はいな。んじゃー回線開いてー、って開いてるの？何処に話せば？

『心配ありません。既に全チャンネルで送信できるようになっています。そのまま、どうぞ。』
あいさー。ん、ん、ごほん。
あー、あー。

…いや、こういうのって第一印象が大事ジャン？
っと。

「えー、いや、すんません。こちらは通りすがりの者でして、はい。
道（？）に迷ったところでこちらに人影が見えましたので、はい。
」
…よし！ぜんぜん駄目だ！

『ですね。』
うっさい。

《…っち。気障なヤローだぜ。》
キザ？何処が？めっちゃ挙動不審なフレンドリーボイスじゃん。
耳がおかしいの？この人？

『どうやら、通信機器が故障していますね。
なぜか語彙変換が行われています。』
えー、なにそれー。
んじゃ、向こうさんにはなんて聞こえてんの？
『えー、こうですね。
「…悪いな。たまたま機影が見えたのでな。」ですね。』
うわー。あいたたた。

《まぁいいさ。詳しい話は後でじっくり聞くことにしてだ。》
はぁ、ありがとうございます。あれ？てことは乗っけてくれんのかな？戦艦。
やっほーい。
あ、あっち向いちゃった。
なんかシカトされてた敵さんがいじけてる。

《覚えとけよ、海賊野郎。トレイラーは人の生命を大事にするんだ。
この広い宇宙で人が生きていくには助け合っていかなきゃならないからな。》

おー。お兄ちゃんいいこと言うね。
で、トレイラーってなんさ？

《あ、ありがとうございます！このご恩は一生忘れません！》
おーおー。平身低頭だねぇ。海賊さん。
絶対再犯するぞ、コイツ。

《何言ってやがる！これからてめぇは仲間共々ビットでキツイお仕置きを受けてもらうんだ！
覚悟しやがれよ！トレイラー流のお仕置きはハンパじゃねぇぞ！！》
あ、そうなのね。ならいいか。

《そ、そんな…！》
いや、その程度で済んでよかったじゃん。死なずにすんで儲けモンでしょ。

《良くやった、カズマ。既にビットには連絡を入れた。追って連中を回収する隊が来る。
…それと、そちらの機体。手助け感謝する。こちらに来てもらえるだろうか？
詳しい話を聞きたいと思うのだが。》
お、なんかいい人っぽい。会話の流れからして、お兄ちゃん、カズマだっけ？の上役の人かしら？
よっしゃー。なんとかなるかもしｒ

『！危ない！』
って何！ザクさん！？いきなり動かんといて！
あー！カズマ君が！ってさっきの海賊が撃たれとる！

…あ、生きてた（ひどい）
ぼろぼろだけど、なんとか脱出できてるみたい。
にしても、なんだ一体？

『敵です。』
敵？

《どうなってんだ、姉ちゃん！？》
叫ぶカズマ君。そうだそうだー。
姉ちゃんがいるならよこせー。（関係ない）

《レンジ内にアンノウン侵入！小型・高スピードで発見が遅れました！》
おうふ。ナイスボイス。
これは美人さんに違いない。

『そんな場合じゃないでしょうに。』
まあね。ザクさん、大丈夫？
『問題ありません。』
これは心強い。

《アンノウンだと！》
上役さんぽい人が叫ぶ。まぁ、あせりますよね。

《アンノウン、来ます！》
来たー！何じゃあれ？虫？人？

《ラダムの指揮官のテッカマンか…。確かに外見は似ているが…》
ん？なんか回線の後ろでがやがや言ってるのに対して上役さんが呟

いてるが。。
らだむ？何ソレ？テッカマンはどっかで聞いたことのあるような、ないような…。

思いだせん。
ザクさん知ってる？

『いえ、私のデータベースにもそのような単語は入っていません。』
えー。じゃあわかんないジャン。

《あいつ等の正体なんか今はどうでもいい！
連中がやる気なら迎え撃つまでだぜ！！》
血気盛んだね。カズマ君。
頑張れ。

《止むをえん…。敵は未知の機体だ、最大戦力を以って当たれ！
…すまないが、援護をお願いできるだろうか？》
あ、ですよねー。ま、ザクさんがやるから大丈夫でしょ。
おkおk。

「いいですよー。」

《すまん。》
いいってことよー。
んじゃ、行きますかね。ザクさん！

『分かりました。他の方に通信を。』
ん？行くよーって言えばいいのかな？
よし。

「んじゃ行きマース。」
急加速するザクさん。
おい！速いよ、速すぎるよザクさん！三倍以上速いんじゃないのか！？
あんた赤いのか？赤い人用のザクさんなのか！？
てか、あんましGかかんないな？何でだろ？
うおッ！接敵が早い！？ザクさんは…、またヒートホークかっ！
手前三体、一気にぶった斬った…。。。
《速い！？》
デュオもビックリさね！
てかやっぱりですサイズに乗ってるのはデュオか。
てことはサンドロックもカトルか。
やばい！残りが来る！！
「ザクさん！！後ろ！！」
『分かってます！』
ショルダータックルからの飛びニーキックとは！やるな！
流石ザクさん、俺達に出来ないことを平然とやってのける！
そこに痺れる！憧れるぅ！
『あと一機です！』
《最後の一機、離脱するよ、お兄ちゃん！》
何！妹ちゃんの萌えヴォイスによる通信が！
っち、遠いか！
ん？カズマ君が飛び出してる？

《野郎！逃がすかよ！》
行け！カズマ！逃がすなよ！

『！レーダーに反応が！』
ん？どしたのザクさん？

《テッカマンブレード！？》
誰ですか？デュオ、お知り合い？
テッカマンってさっき言ってたヤツですよね？何だろ、味方？

《いえ、違います！》
お、カトルも喋った。全く、もっと喋れよ。
じゃぁなにさ？

《待て！様子がおかしい！》
何が？
んな！？いきなり突っ込んで、らだむ？を潰しやがった！？

《仲間割れかよ！？》
《気をつけろ、カズマ！あいつ、こっちに来るぞ！》
《くっ！》
やばい！デュオとカズマの方に！
って、あら？行っちゃった？

なんか、凄いスピードで離脱してく機体。
なんやねん。

《白いアンノウン、レーダー圏内から離脱していきます。》
お姉さんから通信が入り、戦艦のほうのレーダーからも離れたらし

い。
しっかし、速かったなアイツ。
ザクさんと同じくらいか？
『私の方が速いです。』
…自慢ですか？

《無事か、カズマ？》
《あ、ああ…。アイツ、俺達に危害を加える気はなかったみたいだ…。》
《お父さん…レーダー圏内にはアンノウン他の反応はありません。》
お父さん！？ってことはカズマのお父さん！？
上役かと思ったのに。。
てことはあれか？家族経営の戦艦なのかしら？
とりあえず、妹さんとお姉さんを下さい。
《…とりあえず危機は去ったか。各機は帰還して状況の報告を。
それと、そちらの君も来て頂けるかな？》
あいあーい。了解です。
さてさて、どうなることやら。
ま、なるようにしかならんか。

『諦めが肝心ですよ。』
…慰めようとは思わないのかい？ザクさん。

第一話　ブリーフィング（前書き）

結構、いろんな方に見て頂いているようで、感謝です！
話は、通常パート（サブタイトル付き）のあとに、今回のようなブリーフィングが入ってきます。
ので、第一話が二つありますが間違いではないのであしからず。

進め方について、基本的には原作に準拠して進めていきますが、こうならんの？とか、こうして欲しい！的なことがあれば仰ってください。

可能であれば、反映させたいと思います。
では、どぞー。

第一話　ブリーフィング

第一話
　ブリーフィング

＝＝＝ＡＬＬ＝＝＝

　一言で言うならば、不気味。
彼の第一印象はまさしくソレであった。
黒いパイロットスーツに身を包んでいる姿までは、まだいい。
均整の取れた肉体は、一流の戦士のそれと見て取れる。
アジア系の顔立ちは整っており、街に出れば、幾人かは振り返るであろう容姿。
乱雑に散らした髪も、ワイルドな雰囲気といえばそうも取れる。

しかし、彼を見て先ず感じるのは、その威圧感。
一体幾程の死線を潜り抜け、また、その眼で死を見つめてきたのか。
眼光鋭く一睨みされれば、一般人など竦んでしまおう。
肌に感じるプレッシャーは、気を抜けば実際に体が傾いてしまいそうだ。

（…何モンだよ。こいつ）
カズマは背中を伝う冷や汗を感じながら、彼のプレッシャーにただ耐えていた。

「…先ず、お礼を申し上げておきましょうか。
今回は協力ありがとうございました。私はこの艦のキャプテンを務める、ブレスフィールド・アーディガンです。」
カズマの父親である彼が、挨拶をする。

今は、彼の後ろにカズマ達家族と、その横にデュオ、カトルが立ち、対する形で会話をしている。

「宜しければ、事情を説明頂けると助かるのですが、ミスター？」
見たところ、己の息子より少しばかり年を食っているような青年に対する対応ではない。
彼もまた、並々ならぬプレッシャーを感じていた。

「…サイトー・キョウスケだ。キャプテン・ブレスフィールド。」
「ブレス、で結構。」

「では、ブレス艦長。
こちらの事情は、所属していた傭兵チームと異性人の殲滅依頼を受けていたのだが、
その際に俺以外が全滅してしまった。
とりあえず近くのコロニーに向かおうとしていた矢先、先の戦闘に巻き込まれた。」

（傭兵…か。これほどの腕を持つ人間なら一度は耳にしたことがあるはずだが、
サイトーか、聞いたことがない。後で調べてみるか。）
「…あまり表の戦場には出ていなくてな。」
呟くように発せられた言葉と共に、場の空気が一段張り詰めた気がした。

（ッ！こちらの考えを読まれた！？表の、と言うことは裏の仕事をしてきたということか…。
なるほど。裏の人間なら名前を知られていないわけだ。このプレッシャーにも納得できる。）
「いえ、詮索するつもりはありません。気を悪くされたなら申し訳

ありません。」
慌てて謝罪するブレスを一瞥すると、興味はないとばかりに視線をそらす。

「しかし、あんた強いな。機体も見たこと無いヤツだし。
なんていうんだ、あれ？」
そこに、今まで沈黙を保っていたデュオが話しかける。

「…死神ほどではないさ。」
「な！？」
動揺するデュオに対し、無表情で語るサイトー。
周囲は聞きなれない単語に首をかしげる。ただ、カトルだけは、油断ならない面持ちでサイトーを見つめていたが。

「そちらのガンダムタイプに比べたら、な。」
自嘲気味に笑う様子からは、余裕が見て取れる。
その様子にデュオとカトルは共に戦慄する。

（こいつは、俺達のことを知っている！？そりゃ多少は名が知られているのは事実だが、
顔バレまではしてないはず！俺の二つ名を知ってるって事は、相当…）
「ま、まぁ。そっちのことはいいさ。ソレより、ブレス艦長。あんたがあの伝説のトレイラー【タカの目】だとはな。」
余裕がなくなったのか、無理やり話題を変えてブレスに向き直るデュオ。
いきなり話を振られたブレスは、思案顔を崩して苦笑いを向ける。
昔話に花を咲かせる彼等を見つつ、サイトーはどこか遠くを見ながら物思いにふけっているようだった。

＝＝＝サイトー＝＝＝

いやっはー！
狭いコックピットから出てきたから体がばっきばきＤＡ・ＺＥ！
いやー、あの後無事に戦艦にお邪魔させてもらったんだけどさ、ほら俺ってあれでしょ。

あれ。

覚えてる？首に管ついてんの。
おかしいだろあれ。

いや、結果からしたら別に問題なかったからいいんだけどさ。
…いやあるな。問題。何でかというとですな…。

～回想～

『着艦終了しました。』
お、ありがとー！ザクさん！！
さて、皆さんにお礼とご挨拶をしなければ！
そんでもってさっきの態度（キザっぽいやつ）を謝らなければ！

「よっしゃ、降りますか。ザクさん、降りるときどうすんの？」
電源落とさなあかんのやろか？
強制終了すると故障するからな。気をつけんと。

『旧世紀のＰＣですか、私は。
そんなことより、その管抜かないと降りれませんよ。』
冗談だって。ホンキにせんといてな（半分マジです）

「これって本当に抜いて平気なんだよね？死なない？死なないよね？」
抜いた瞬間、残念！私の冒険はここで終わってしまった！とかナシだかんね。

『大丈夫です。理由は不明ですが、ソレを抜いたことによる被害は無いはずです。』
なんでわかんねん！

えーい！ままよ！！
抜かんと降りれん！ということは、抜こう、と思った瞬間！既にソレは完了しているのだぁ！

…カポッ。

あ、取れた。
何だ、以外にあっさり抜けんのね。もっと激しいのかと思った。

「…これで、問題ないな。」

…？あれ？何ぞ違和感が。

『あー…。ちょっとなんか喋ってもらえます？適当でいいので。』
ん？いいよー。えーと…「本日は晴天なり」と。

「いい、天気だな。」
…おいいぃ！？何これ！？
え？誰？誰これ？

『やっぱり。』
なに！？やっぱりって何！？

『その管から、私とアナタを繋いで色々情報共有を行っていたらしいのですが、
私の方の通信機器の故障がそちらにうつってしまったようです。』
っておい！何でやねん！？うつるんか、それ！

『まぁ、健康状態に影響はありませんので、問題ありません。』
あると思うなー、うん。
…まぁ、仕方ないかぁ。はあ。
後で治るといいなぁ。

「では、いくか。」
うん。慣れない、これ。

『お気をつけて。』
はいはーい。いってきまーす。
おぉ、パネルとかの光が消えて電源が落ちた。
自分で落とせるんだ。

でも、起動するときってどうなんだろ？勝手に起動できるのかしら？

ま、いっかー。なんとかなるでしょー。あははー。

～回想終了～

ってな感じでした。
いやー、困ったね。全く。ＨＡＨＡＨＡ。
…はぁ。

ま、うだうだ言ってても始まらないし、ささっと合流しましょうか。
さーて、皆さんどちらざんしょ？

お！いた！あの三つ編みは、デュオ！
隣の金髪はカトルか！いやー、イケメンだなぁ。眼福眼福。

え？嫉妬とかしないのかって？
自分もイケメンと思ってる残念ＭＵ・ＳＨＩ・ＹＡ・ＲＯだって？

ははは。
何を仰るウサギさん。

そんなもん、とうの昔に諦めて開き直ってます。
黙れ。

「あんたが、あの機体のパイロットか…。」
お、デュオの方から話しかけてきてくれた。
あいあい、そうざんすよ。と

「ああ。」
…全く、もう少し愛想良く出来んのか、俺。
あ、ザクさんまだ外から見てないや。
やっぱ赤いのかな？速いし。

あれ？赤くない。
普通の緑色だ。嫌に傷だらけだけど。
何でこんなに傷ついてるんだろ？さっきの戦闘でダメージもらってないと思ったけどな？
後でザクさんに聞いてみよ。

あ、指揮官用のツノはある！
ヤッパ、ツノ付きでしょ！

「おーい！こっちだ！早く来いよ！」
おろ？通信で聞こえたお兄ちゃんの声が…。

あ、あの子がそうかな？やんちゃそうな顔してんなぁ。
隣にいるのが妹ちゃんかな？うん、かわいいね。
おっ持ちかえりぃぃ！（どこにだ）

っと、トリップするところだった…。
デュオたちも行ったし、ついてこ。

しかし、凄いなぁ。
戦艦って始めて乗ったよ、当たり前だけど。
近未来って感じがすんなー。ドアとか「パシュッ！」って開くし。
あれだね。地球防衛軍の基地みたいな感じだね。

とか何とか考えてたら、妹ちゃんがこっちに来た。

うん、やっぱりかわいい。

「あの、さっきはありがとうございました。」
うん？さっき？戦闘で助けたことかしら？

「お兄ちゃんが、海賊の人を撃とうとした時、止めてくれて…。」
あ、そっちね。
ははは、気にしちゃいかんよ！当然のことをしたまでさ！

「気にするな。」
…全く。このテンションの低いのをどうにかできんのか？
妹ちゃんもうつむいてしまったでないの。

「…うううう、何でか顔があっついよ～。」
あら？ほっぺが赤い？なんかぶつぶつ言ってる気がするけど、気のせいか？

とか何とかしてるうちに、ブリッジに到着ー。
中に入ると、多分戦闘中に話してたお父さんとお姉さん（二人いたのでどっちかだろう）、
若い男の人とちっちゃいロボットが居た。
なんか、みんなこっちを見てる気がする…。照れる。
ああ、お姉さんそんなに見つめちゃいやー。
…何故だか怖がられてる気がするんですけどねー。
何故だ。こんなにもフレンドリーにニコニコしているのに…。

よし。
もっと気合入れてニコニコしてみよう。

そーれ、ニッコニコーー！！！！（ズゴゴゴゴゴゴ）

うん、更に引かれた気がする。
っと、お義父さんがお礼を言ってきたよ。（娘さんを下さい）
へー、あんたもブレスって言うんだ。俺は違うよ。

あ、わたくし、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯を使い、姓はサイトー、名はキョウスケ、人呼んでフーテンのサイトーと発します。（大嘘）
…口上ってなんかいいよね。

あ、事情説明せな。
とりあえず、でっち上げでザクさんと作ったお話をちょちょいと話して、と。
まぁ、嘘っぽいお話ですけどね。誰が傭兵やねん。俺がそんなんに見えるか！？
心配だから、フォローしとこ。
あたしは、いっつも裏方のお仕事（雑用）でしたよー。

「…あまり表の戦場には出ていなくてな。」
うん、なんか微妙な言い回しになってるね、これ。
ほら、ブレス艦長もデュオ君とかも引いてるもん。
うわー何言っちゃってんのコイツきもーい、とか思ってるに違いない。
顔強張ってるし。

「いえ、詮索するつもりはありません。気を悪くされたなら申し訳ありません。」
ハイハイ、そういうことにしといてやるよ的な空気で返された。
うう、ごめんなさい。
こんなダメダメなあたしは、穴掘って埋まってますぅ。

「しかし、あんた強いな。機体も見たこと無いヤツだし。
なんていうんだ、あれ？」
ほらー、なんかデュオ君も気を使って話題変えてきてるじゃーん。
もういいよ。俺のことは放っておいてくれよ（泣）
デュオ君なんか「死神」とかカッコいい二つ名持ってるし、強いじゃん。

「な！？」
あれ？声でてた？
なんか驚いてるけどどうしたん？
…あ！あれか、もしかして内緒にしてたとか？
うわー、マジか！
なんかカトル君もこっち見てるし！
いや、そんなはず無い！ガンダムタイプといったら相当有名なはず！
きっと、「キャー！ガンダムのパイロットの”死神デュオ”様よ～！」とか言われてるに違いない！
…そうだといいなぁ。
はは、乾いた笑いしかでてこんわい。

「ま、まぁ。そっちのことはいいさ。ソレより、ブレス艦長。あんたがあの伝説のトレイラー【タカの目】だとはな。」
あ、話題変えた。
やっぱり内緒系の話だったのか、あっぶねー。
ナイス！デュオ！

あちらさんはなにやらごちゃごちゃ話してるし、もういいのかな？
俺の方は。
まぁ、色々詮索されると困るしね。

しかし、これからどうしたもんかねー。

とりあえず、誇りがどうとか、トレイラーの心得がどうとか言ってたけど（よく聞いてなかった）
この艦は地球に行くみたいだし、なんとかなるかなぁ？
なるといいなぁ。

さて、どうなることやら。

追記。

働かざるもの食うべからず、的なことを言われて、地球に着くまで、デュオとカトルと同様に
雑用をあてがわれました。
ただ今、一生懸命下着という名の布をゴシゴシしております。

…妹ちゃん、黒はまだ早いと思うなぁ。ぼかぁ。

第一話　ブリーフィング（後書き）

はい。
どうもです。如何でしたでしょうか？
関係ないですが、めちゃくちゃ眠いです。仕事徹夜でそのまま執筆してるのでテンションがおかしいです。
ヒーハー。

はい。すみません。
では、また次回！

第二話　白き鉄騎士たち　（前編）（前書き）

どうもです。
先ずは、第一話終了現在のパラメーターをどうぞ。
オリ主もザクさんもチート性能発揮中。（そこまで激しくは無い、と思う）

ちなみに主人公のパラメーターは、各主役クラスのトップパラメーターより大体２０前後高い数値です。
防御を除いて、全パラメーター最強。
ザクさんも、運動性、装甲値共に最強クラス。
更に異常なのは、移動力が「９」もあり、パーツスロットが４つという部分。
もう装備次第ではっちゃけユニットの完成の予感。
改造して、改造ボーナスもつけたらもうウハウハです。
…強いなぁ。こんなキャラでやったらサクサクストーリー進めますよねー。

これから話が進むに従い、レベルアップ・改造・スキル／強化パーツ装備をしていきます。
ので、時たまパラメータを前書きに記します。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＜サイトー・キョウスケ＞　（パイロットステータス）

【レベル】　：２
【性格】　：強気

【ＳＰ】：１１５
【格闘】：１８３
【射撃】：１６７
【防御】：１４８
【技量】：２１３
【回避】：１９２
【命中】：１７６
【技能】：斬り払い
：マルチコンボ　Ｌｖ２
：インファイト　Ｌｖ３
：ガンファイト　Ｌｖ１
：ヒット＆アウェイ
：？？？（まだ不明な特殊技能です）

＜隊長のザクさん＞　（ユニットステータス）

【改造段階】：０
【ＨＰ】：６５００
【ＥＮ】：１７０
【運動性】：２０５
【装甲値】：２１５０
【サイズ】：Ｍ
【移動力】：９
【移動タイプ】：陸
【装備パーツ】：ナシ（空き４）
【地形適応】：空（－）
：陸（Ｓ）
：海（Ｂ）
：宇（Ｓ）

第二話　白き鉄騎士たち　（前編）

第二話
　白き鉄騎士たち

＝＝＝サイトー＝＝＝

　どうも、私です。
今日も今日とてお洗濯。最近はシホミお姉様のシルクの布をゴシゴシするのにも慣れてきました。
（ぬるま湯で優しく揉むのがコツさ！）

しかし、アカネさんは胸のサイズが小さいなぁ。
ははは、ミヒロちゃんの方が大きいんじゃないか？
…ミヒロちゃんはまだブラジャーじゃないから分からんけどね。

あ、今の三人。皆カズマ君の姉妹です。

一番上のシホミさん、おっとりとした人で人格者。
カズマも頭が上がらないようで、静かーに怒られて凹んでるのを良く見かける。
ヴァルストーク、あ、この戦艦の名前ね。ではオペレーターを務めてる。

次にアカネさん、元気いっぱいの方。あとちっぱいの持ち主。
慌しい性格で、いつもカズマを弄ってる。
あと、料理の味付けが超前衛的で、なぜか全てマヨネーズ味になるという恐ろしい特技を持つ。

戦闘時には砲撃手を務めるらしいが、まだその勇士を拝見したことは無い。

最後にミヒロちゃん、お兄ちゃん（カズマ）思いのいい子。
兄を反面教師にしたのか、とても素直で常識のある子。
ヴァルホーク、これはカズマ達の乗っている機体ね。のサブパイロットとして、管制システムを担当している。
…まだ若いのにねぇ。おいちゃん、泣けてくらぁ。

とまぁ、こんな感じで美人三姉妹を持つカズマは死ねばいいと思います。
もしくは寄こせ。

とか何とか考えている（妄想）うちに、今日の分の仕事が終了。
ザクさんの所にでもいこうかなーっと。

テクテク。

「お。サイトーさんじゃねぇか。」
うん？カズマ君？どしたの？

「なんだ、サイトーさんも自分の機体の整備か？」
あー、カズマ君はヴァルホークの機体整備か。
この艦整備の人いないしねー。多少は自分でやってるのか。
本格的なのは別にして、パイロットの人たちってある程度は自分で整備できるっぽいしね。

「ああ。そうだ。」
しかし、相変わらずだな。この口調変換機能（？）もどうにかせんと。

というか、俺って機械なのか？自分で確かめようにも怖くてできんし…。
普通に飯とか食べれたしなぁ。もちろん排泄も。
けど、首の後ろに穴開いてるしなー。どうしたもんかね、全く。

ってあら？なんかカズマ君震えてるけど大丈夫かしら？風邪でも引いた？
気を付けないと駄目だよー全く。
君が夜な夜な冷蔵庫を漁っているのには気がついていたけど（たまたまトイレに起きたら見かけた）。
まぁ、アカネさんの料理当番の時は思いっきり食べれないからねぇ、育ち盛りにはマヨネーズ味オンリーのアレはつらいという気持ちはよーく分かる！
けど、そんな考えじゃ駄目だ！
ちゃんとアカネさんに言って、ちゃーんとした料理を作ってもらえるよう頑張ってもらおう！
俺も一緒に頼んであげるからさ！変な考えを起こしちゃ駄目だ！（冷蔵庫を漁る的な意味で）

「…下手な考えを持たないことだ。そして、気を付けろ。」
うんうん。そうだよ。
話せば分かってくれるさ、アカネさんも。

「あ、ああ。」
どうやら、こちらの言っていることが分かってくれたらしい。
なぜか先程よりも震えが強くなった上に、唇が真っ青だが…。
本当に大丈夫なかしら？

とか、一人考えの海に沈んでいると、まだ若干調子が悪そうだったが、

気になるほどでもなくなった様子のカズマが、こちらに顔を向け尋ねてきた。
「…そうだ、そういやあん時は聞きそびれちまったけど、あの機体。あんたの機体の名前ってなんていうんだ？」
いつの間にやら到着していた格納庫に鈍く響くカズマの声。
眼前に佇む、深緑（しんりょく）の巨人を見上げて。
カズマがこちらを見ている視線を感じつつ。
「…隊長の、ザクだ。」

格好よく決めたと思ったら、まぶしくて顔が歪んだ。
…いや、格納庫のスポットライトがまぶしくて、つい。

＝＝＝カズマ＝＝＝
やっと解放された。
全く、デュオと一緒にサボろうと思ったのに、ついてねぇ。

シホミ姉さんたちにこってり搾られちまった上に、罰として掃除追加とは、ついてない。
カトルの野郎は姉さん達に可愛がられてるみたいで、助けてくれそうにないし、
デュオにいたっては同罪。共に励む同士だ。

サイトーさんは…。
ありゃ駄目だな。いろんな意味で当てになんねぇ。

しっかし、何モンなんだろうな、アイツ。
親父は、どうやら凄腕の傭兵らしいって言ってたけど…。
とてもじゃないが、一端の傭兵にあそこまでの凄みは感じられない。
アイツと対峙した時、あの眼光で睨まれた時は心臓を握られたかと思った。
今思い出しても冷や汗がでやがる。

乗ってる機体にしてもそうだ。
あの変な機体は特注のカスタム機とか、どっかの試作機の横流しを手に入れたとか、そんなんだろうか。
ゴツイ見た目に反しての超高速機動。
正直、我が目を疑った。モビルスーツにあそこまでの動きをさせるには、一体どうしたらいいのか。
パイロットの腕か、それとも機体に組み込まれたシステムか。
…あるいはそのいずれもか。
とにかく、異常なのは確かだ。パイロットも、機体も。

…俺だって、トレイラーの端くれだ。そんなに数は多くは無いとはいえ、いろんな宇宙海賊とやりあって来た。
あいつ等は基本的に、軍の横流し品だとか、スクラップになった機体の、使える部分をツギハギにして使ってたりする。

当然、古今東西あらゆる機体を使う。
それでも、俺はあんなのを見たことない。
俺達の艦(ふね)も相当にいわく付きだが、あいつのもそうに違いねぇ。

思案しながら歩いていると、格納庫に向かう通路に出ていた。
まぁ、ヴァルホークの調子でも見ておこうかと思い、目的地に向かおうと進むと、思考のなかの人物が横の通路から出てきた。
鍛え上げられた肉体は、服の上からでも見て取れる。
何処を見ているか分からない双眸は、常に周囲に気を払っているように感じられた。
この間のことを思い出し、また汗が手の中で滲むのを感じる。

「お。サイトーさんじゃねぇか。」
自分でも、動揺を上手くごまかせたと思う。
普通に挨拶が口から出てきたことにほっとする。

「なんだ、サイトーさんも自分の機体の整備か？」
格納庫に来た、ということはあの機体の整備に来たのは確実だろう。
というか、その目的以外でこんな所をうろつかれたんじゃ、たまったもんじゃない。

「ああ。そうだ。」
低い声。

決して大きな声ではないが、腹の底に響くようなソレ。
思わず、恐怖の為か震えてしまった。
何なんだ？一体全体、コイツのプレッシャーは。
本当にこんなヤツをこの艦に置いていていいのか？親父に言って、何とかコイツをどうにk

「…下手な考えを持たないことだ。そして、気を付けろ。」

ぞわり。
先程とは比にならない。
完全な寒気。

コイツは、俺が何を考えてるか理解(わか)っている！
ちゃちなごまかしなんか通用しない、ソレこそ俺なんかの！

「あ、ああ。」
何とか、口から声を絞り出せた。
でも、駄目だ。
別の話を、俺とは関係の無い話をしないと、俺が持たない！

「…そうだ、そういやあん時は聞きそびれちまったけど、あの機体。
あんたの機体の名前ってなんていうんだ？」
ちょうど、格納庫についた時、俺の目にアイツの機体が飛び込んで
きたから、思わずそう聞いてしまった。

おずおずと、アイツを見上げる。

「…隊長の、ザクだ。」

初めて見た。
こんなに苦しそうに語る姿を。

心の奥からの悲哀を感じる。
そして、分かった。

どうやら、ザクと言うらしいこの機体は、アイツの傭兵時代の隊長であった人物から受け取ったものらしい。
恐らく、アイツと隊長とやらは相当に深い絆で繋がっていたようだ。
表情が、そう物語っていた。
隊長が戦死かなにか、とにかく戦場に立てない状態になり、無事だった機体を彼が引き取ったのだろう。
あの機体に残る傷は、恐らくそのときのもの。
なぜ、ああも傷だらけなのか、やっと分かった。

…彼は忘れたくないのだ。
己の、隊長との日々を、隊長を救えなかった己を。

彼ほどの人物でも、どうにも出来ないこともある。
戒めとしての象徴を残しておきたいと思う心がある。

彼は、強いだけじゃない。
恐ろしいかもしれない、だが、彼の心には暖かい何かがある。
そう、思った。

その瞬間、彼の印象がふっと、変わった気がした。

気がつけば、体の振るえは止まっていた。

＝＝＝サイトー＝＝＝

はい。なにやら大変な事になっております。
なんかですね、今地球に向かってるじゃないですか。

んで、地球の周りにある「オービタルリング」っていうのがあるらしいんですよ。
ソレをですね、この間の虫みたいな敵、ラダムって言うんですけどね、そいつ等がそこを占領して地球に攻めてきてるって言うじゃないですか。
…どうにかしろよ、全く。

デュオとかが居るんだから、少なくともガンダムWの戦力はあるんだろうし、何とかせーよ。
まぁ、過ぎたことをギャーギャー言っててもしょうがない。
大事なのは今。

…そう、まさしくそのラダムと交戦しようかというところです（泣）
しかもラダム以外にも、変なヤツいるしー。
何アレ？あれも虫っぽいよ。

あー、やだなー。
戦いたくないよー。

「謎の敵を追ってきてみれば戦闘中とはな…。」
ブレスかんちょー、追わなくていいのに何故追ったし。

「見ろよ、親父！この前の白いヨロイ野郎もいるぜ！」
あー、カズマ君は元気だねー。って、あれはこの間の速いヤツ？
何でこんなとこにいんのかしら？

「ラダムとスペースナイツのテッカマンブレードもいるぜ！」
ねーねー、デュオ君、その「すぺーすないつ」ってなんさ？
初めて聞く単語よ？
テッカマンはこの間チラッと聞いたけどさ。

「多勢に無勢じゃねえか！こんな状況、見過ごすわけにはいかねえ！親父、俺は出るぜ！」
いや、落ち着け。先ずは状況を良く見なさい。

「外宇宙開発機構のスペースナイツか。フリーマンに借りを返しておくのも悪くないな。」
誰やねん。ソレ。
ってか、アナタの借りに僕を巻き込まんで下さい！

「よし！これよりヴァルストークはスペースナイツを援護する！」
ですよねぇ！

…まぁしゃあないか。
置いてもらってるしなぁ。

「ブレス艦長！僕とデュオも出ます！」
カトルも頑張るなぁー。

「スペースナイツとプリペンダーも大元は同じだからな。
仲間の救援というわけか。」
あ、そうなのね。プリペンダーって、カトル達の所属してるとこだったね。
じゃあ、頑張らないと。
よっしゃ。んじゃあ気張って行きますか！
既にカズマとか走っていっちゃったしね。追いかけないと遅れる。

…うおおおおおおおお！
全・力・疾・走！！

はい！到着！！
なんか途中でカズマっぽいのを轢いた気がするが気にしない！

よっしゃ！テンション上げてくよー！
ザクさんもいつの間にやらコックピット開いてお出迎えしてくれてるし、行きますか！

よいしょー！
気合と共に、俺！参上！

『お帰りなさい。サイトーさん。』
ただいま！！
お！ザクさん、既に起動済みだね。
コックピットに滑り込んで、と。

『例の管を。』
あいさー！了解っと！

…がぽっ。

…うーん、相変わらず、しまらない音だ。
しかーし！

「よっしゃ！これで思う存分喋れる！」
これよ！こうでなくてはな！
また僕は喋れるんだ！こんなに嬉しい事は無い！

『全システム、オールグリーン。いつでも行けます。』
オッケー！いつの間にか、カズマ達も到着してるし、出れるみたいだ。
右端のコンソールから、シホミさんから通信が入る。
《気をつけてください、皆さん！あのラダムと謎の敵は互いに敵対しているようです！》
えー、それって三つどm
《つまりは三つ巴ってわけかよ。コイツは面倒だぜ。》
…台詞をパクらないでほしいなぁ。デュオ。
『なんにせよ、敵勢力が二分しているのには注意が必要ですね。挟撃に注意しましょう。先に片方の勢力を潰します。』
流石ザクさん。ヤル気満々ですね。
『敵は合わせて１０機。１分で仕留めます。』
おうふ。気合十分ですね。

…さて、他の３機は出た。
次はこちらの番だ。

初めて、ザクさんが射出レールに足をかける。
きちんとした形での、出撃。
ざわざわと、奥底から何かがこみ上げてくる。
寒くも無いのに、鳥肌が立つ。
嗚咽を飲み込む。
目頭に灯がともる。

否応無しに、鼓動が高鳴る。
ソレは、不安か、恐怖か。
…別の何かか。

『合図を。』
《合図を。》

ザクさんと、シホミさんの声が重なる。
ドクン、と大きく心の臓が跳ねた気がした。
…まるで、大型のエンジンが唸りを上げるように。

「よっしゃぁ！
サイトー・キョウスケ！！ザク、出る！！！」

赤が、緑に。
視界が黒に。
心が宇宙(そら)に。

第二話　白き鉄騎士たち　（前編）（後書き）

はい！
読んで頂き恐悦至極！

いきなり前後編になってしまいました！
すみません！

後編は次回！
しばし！しばしお待ちを！
（頑張って早めに上げれるといいなぁ）

第二話　白き鉄騎士たち　（後編）（前書き）

早く上げようと思ったのにこれですよ。（平身低頭）

第二話　白き鉄騎士たち　（後編）

＝＝＝サイトー＝＝＝

ヴァルストークの射出レールの光が、高速で視界を流れる。
宇宙（そら）の黒が視界を埋める。

…ああ。
宇宙（そら）はかくも美しい。

『まぁ、戯言はその辺りでいいのでは。』

…なんだか久しぶりな気がするから、格好よく決めようとしている
ボクにソレは無いと思います。
ま、敵さんが迫ってきてるので自重しますが。

「ふははは！遠からん者は音にも聞け！近くば寄って目にも見よ！
！」
ゆけぃ！ザクさん！目の前の虫っころを叩っ斬れぃ！

『…自重の意味を辞書で引くことをオススメします。』
ふむ。嫌だ。
めんどくさい。

《そこのトレイラー！
救援はありがたいが、こちらはちょいと理由（わけ）ありだ！》
うん？通信？

『既に戦闘中だった戦闘機の方からですね。』

ほう、理由(わけ)とな。

《理由(わけ)あり？》

ブレス艦長も気になりますよね。そりゃ。

まぁ、めんどくさそうな匂いがぷんぷんするぜぇ！的な感じですが。

《あと5分の間に敵を全滅させないととんでもないことになる！
　協力を頼むぜ！》

待てコラ。

何で時間制限つきやねん。

あれか？ウル〇ラマンが来てるのか？

『いえ、あちらは3分ですので微妙に違うかと。』

何故ザクさんが、かの巨人ヒーローを知ってるのかはさておき。

うーむ、5分かー。

ザクさん、どうでっしゃろ。

出撃前に1分で潰すとか言ってらっしゃいましたが？

『我が前に敵は無し』

やる気満々グローブですな。

《そちらの事情はあとで聞こう。
　同じスペースマンとして協力させてもらおう。》

ブレス艦長もそう言ってますし、頑張りましょうか。

《よっしゃ！地球を前にしてドジを踏むわけにはいかねぇぜ！！》

うむ。こちらもザクさんに負けず劣らず、やる気十分なカズマ君。

頑張れ、おっさんが【応援】してあげよう。

「カズマ君！その意気だよ！！けど焦っちゃ駄目だよ（はーと）」

主に単機駆けで突っ走った後処理のメンドクササ的に。
『気持ちが悪いことはやめましょう。例の故障のおかげでそのまま伝わってはいませんが。』
誰が気持ち悪いか。
この「せくしーぼいす」でテロテロよ。

『なんですか、その怪しい擬音は。』
細かいことを気にしたら負けかな、と思うよ。

《…！よっしゃ！やるぜ、サイトーさん！！》
ほら、カズマ君もビンビンだって。

『…もういいです。そんなことより、時間がありませんよ。』
おー、しっと！
ではでは、改めてレッツらゴーさ！

加速。加速。加速。

いやっはーー！！
矢でもテッポでも持ってこんかーい！！

袈裟掛けからの大上段。

「1！」

恐らく、自身が斬られたことを理解するまもなく、事切れる。
勢いをそのままに宇宙（そら）を一巡し、鈍く光るその脚を叩き下ろす。

「2！！」

肉がひしゃげる音を後方へと流す。
背中のスラスターで急制動し、停止。再度ブースターを展開しての
高速タックル。
肩に付いた凶悪なソレに、固まっていた彼等は潰される。

「3！4！！5！！！」

四散したソレ等がまとわりつくのを気にもせず、
四方からこちらに突貫せよと突っ込んでくる。
対し、腰溜めに携えたヒートホークを握り締め、一瞬。

豪。

音の通らない真空上で、確かに聞こえた。
耳ではなく、肌で。

「6、7、8、9！」

真っ二つ。
まさしく、その通り。

『我がヒートホークに、断てぬものなし』
落ちを付けることを忘れないザクさん、流石です。
というか、何故そのセリフ？

『ビビッと来ました。』
さいですか。
あれ？そういえば、あと1体いなかった？

『あ、それならカズマさんが落としてました。』

ほう、やるな！カズマ！
ま！ザクさんには敵わないがな！

《敵対勢力の全滅を確認しました。
　周囲に増援もありません。》
シホミお姉さまの癒しボイスで全滅を確認っと。
おｋおｋ。
多分時間的にも大丈夫だろう。

《よし…ご苦労だったな、みんな》
ブレス艦長からも、労いのお言葉を頂く。
なんだか、声が震えてるような気がするが、大丈夫だろうか？
親子そろって風邪かしら？
気をつけないと駄目ですよ。

《アキ、時間は！？》
《ギリギリ、間に合ったわ！急いでＤボゥイを回収して！》
はて、なんだか戦闘機の方でギャースカ言ってますが、どうしたんだろ？
あと、素敵ボイスが聞こえた。（比較的どうでもいい）

『片方の白い機体が、高速で接近中。』
はい？もう戦闘終わったでしょ？

《アイツ、やる気かよ！》
《イバリューダー！！》
何のこっちゃ！！分かるように説明せい！
とりあえず、止めるぞ！ザクさん！！

『了解！』

そおぃ！
危ない！刺さる！でも止めた！！偉いぞ俺！！
《Dボゥイ！》
いや、素敵ボイスのお姉さん！
俺を心配してくれ！

《答えろ、イバリューダー！
お前の目的は何だ！？
なぜ、俺達を助けた！？》
いやいや、Dボゥイ（？）さん！？
なにシカトして会話してるのかな？

《オーガン…。》
《オーガン…？》
何オウムごっこしてるのこの白い人達。
しかも人を間に挟んで。
いい加減手が痺れてきますよ。ザクさんの。

あ、行っちゃった。

《何なんだよ、アイツは！？
ヒイロ並に訳わかんねえぞ！》
その気持ちはよく分かるが、今この場に居ないヒイロがかわいそ過ぎやしないか。デュオ？
…一瞬同意してしまったのは内緒だ！

《最後に何か言っていた様だけど…。》
カトルくん、スルーかい。

《オーガン…って聞こえたけど…。》
《自己紹介ですかね…。
　そうだとしたら無軌道な割りに律儀な方ですね。》
アカネさんの呟きにホリスが答えるが、あんな自己紹介はやめて欲しい。マジで。

《オーガン…。
　イバリューダーのデトネイター・オーガン…。》
白い人（Dボゥイ）が黄昏てるけど、気にしない。

＝＝＝カズマ＝＝＝

　よっしゃ！久々の戦闘だ！腕が鳴るぜ！！
あっちのスペースマンを助けりゃ良いんだな？
数は多いが、こっちにゃガンダムシリーズ２機にサイトーさんが居るんだ。
負けるはずはねぇ。

ただ、向こうのオペレーターが言ってた「５分」のタイムリミットが気になるが…。
ま、ようはさっさと仕留めちまえばいいってことだろ！
それに…。

「よっしゃ！地球を前にしてドジを踏むわけにはいかねぇぜ！！」
そう、もう直ぐ地球だ！こんなとこでチンタラやってる暇はねぇ！

《…カズマ、その意気や良し。だが、焦るな。》

静かに、戒められる。
一瞬、びくりと体が震えるが、語彙に含まれる微量の暖かさに気付き頬が緩む。
体が別の意味で震える。
…武者震い。

恐らく、歴戦の猛者からすれば、己など矮小にも程がある。
彼からすれば、自分など居ても居なくても同じ。
…いや、下手をすれば居ない方が彼にとっては楽なのかもしれない。
邪魔者が居ないのだから。

しかし、彼は言った。
『焦るな』と。
つまり、自分もこの場にいていいのだ。
焦らず、己のできることをすればいいのだ。
何故か、彼に認めてもらった気がした。体が歓喜した。震えた。

体は熱い、しかし、頭は冷えた。

「よっしゃ！やるぜ、サイトーさん！！」
吼えて、操縦桿をギリリと握りこむ。

その声に答えたかどうか、サイトーさんの駆るザクが一瞬ぶれる。
真空時では、空気抵抗が無い為推進力は己が出力するモノのみとなる。
まるでそこから掻き消えたかと錯覚させられた。
…どんだけ高機動なんだ、あの機体は。

「…！おにいちゃん！来るよ！」
！
ミヒロの声で我に返る。
そうだ。
焦るな。
まだ、まだ俺はあそこまでは行けない。
でも、いつか行ってやる。あの高みまで。
その為には…。
「先ずは目先の奴等からだ！行くぜ！！」

今回の戦闘で、カズマは過去最高の機動データを記録した。
そして、ソレは今後も塗り替えられることとなる。

＝＝＝ブレス＝＝＝

さて、困った。
スペースマンに借りを作るきっかけが出来たとはいえ、状況が悪い。
件（くだん）のスペースマンは、何か問題を抱えているようだ。
向こうのオペレーター曰く、５分以内に戦闘を終わらせないとまずいらしい。
まぁ、こちらにはガンダムシリーズを含めて４機、しかもそのうち一機が正体不明の超高機動機体。
恐らくは、何とかなるだろう。

しかし、心配なのは息子、カズマだ。
先程も、一人焦る様にして駆けて行った。
…気持ちは、分かる。
色々言ってはいるが、アレでも十分戦力としては数えられる。
それこそ、そこらの宇宙海賊なぞ目ではないくらいには。
今、カズマと共に戦っている彼等は違う。
彼等は、ガンダムシリーズを駆るエースであり、そして凄腕だ。
それらからしたら、まだまだひよっこもいいところ、下手をすれば足手まといになりかねん。

一つ、釘をさしておくか。
現に、調子に乗っているようだし。

そう思い、通信を開こうとするが、ソレは遮られる。

《…カズマ、その意気や良し。だが、焦るな。》
サイトーの声が、低く響く。
言葉すくなだが、故に理解できる。
ふっと、肩の力が抜けた事に気付き、通信機から手を離す。

ああ、これで大丈夫だ。

艦長の椅子に深く座りなおし、モニターを見上げる。
これでなにも問題ない。

…まぁ、9体もの敵を一瞬で潰したサイトーを見た後、暫く呆けてしまい、通信に支障が出たが。

第二話　白き鉄騎士たち　（後編）（後書き）

はい。
お久しぶりです。
いやー、まさかこれほど空いてしまうとは。申し訳ありません。（土下座）

あ、お気付きの方もいるかと思いますが、
この小説には、パロディ（？）が多分に含まれて居ます。
まぁ、意識して入れていますので、一話内に必ず入れるようにしてたりします。
分かった人は、ほくそえんで下さいｗ

ではでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2207m/

スーパーロボット大戦Ｗ ～ザクさんと一緒～

2010年10月11日01時15分発行